P-034

児童発達支援センターにおける発達障害児療育クラスの見学研修後の保育士の認識

西田　紀子[1]、二重佐知子[2,3]、飯塚由美子[4]、大向　正展[4]

[1]大阪青山大学　看護学部、
[2]姫路大学健康・教育実践研究センター、
[3]社会福祉法人願成寺保育園、
[4]明石市立児童発達支援センター

目的：未就学児の発達障害は、「気になる子ども」として保育所等の集団場面で気づかれることが多く、保育士の関わりが重要となる。そこで、気になる子どもへの関わりを経験的に学ぶことができるように、A市立児童発達支援センター通所型療育施設の療育の実際を見学する研修を試みた。研修後の保育士の認識を明らかにする。方法：対象はA保育所の保育士30名で、１クラスに１名ずつ配置し半日間見学した。研修後に、マイクロソフトフォームズを利用したアンケート調査を実施した。内容は、属性、研修内容や気になる子どもの保育効力感の変化等の選択式調査と、自由記載であった。量的データは記述統計を行った。自由記載の内容は、計量テキスト分析ソフトKHCoder（ver.3）を用いて頻出語の共起ネットワーク分析を行い、言葉が強く結びついている部分をクラスター分けした。１つ１つの言葉の前後にある記述データの文脈を確認してクラスター名をつけた。所属施設の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。結果：対象者30名のうち、14名（47％）より回答を得た。研修内容を保育に活用できたと回答した保育士は11名（79％）であった。気になる子どもの保育効力感のうち50％以上の保育士が研修後に高くなったと回答した項目は、「指示が通りにくい子どもに対して理解しやすいよう環境設定ができる」、「問題行動（パニック，乱暴，興奮，こだわり等）に対し，何らかの対処を冷静に行うことができる」であった。自由記載は、【障害がある子どもに合わせた個別の関わり・配慮の実際】【個別の特徴をとらえた工夫】【保育所で取り入れる難しさ】【クラスの子どもの理解や保育士の加配など人的環境の整備の必要性】【楽しく安心して過ごせる保育環境の設定】【自分の保育へ活用】の６つのクラスターが形成された。考察：保育効力感の変化、個別の関わりや配慮の実際、工夫を学んだという認識から、療育場面の見学によって机上の講義では得られない実践的な学びができたと考える。一方、保育士は、それらの学びについて保育所で実践する難しさを感じ、物的・人的環境を整える必要性を認識していた。研修内容を保育に活用するためには、保育所全体でどのように取り組んでいくかを検討し、調整する必要がある。発達支援センターからは、気になる子どもへの療育的な関わりについて保育所の集団生活の実情に合わせた助言を得られように連携する必要があると考える。

P-035

保育所における保育士と看護師の感じる「こどもの見えづらさ」と課題の検討

木村　美佳[1]、両角　理恵[2]、眞鍋裕紀子[3]、高橋　良子[4]、及川　郁子[5]

[1]東京家政大学短期大学部　保育科、[2]防衛医科大学校、
[3]太陽の門福祉医療センター、
[4]全国保育園保健師看護師連絡会、[5]旧　東京家政大学

【目的】本研究は、保育士および看護師が保育中に感じる「こどもの見えづらさ」の現象について、専門職ごとの認識の相違と保育所における課題を明らかにする。【方法】保育所に勤務する保育士５名、看護師３名を対象に半構造化面接を行った。分析はKHcoderを用いて量的・質的に分析した。倫理的配慮として、対象者に口頭と文章で研究の目的、個人情報保護、データの管理､協力撤回の自由について説明し同意を得た。【結果】保育士は、こどもの個々の特徴的な行動や発達の遅れ、集団保育中の問題行動、生活面のつまずきを「こどもの見えづらさ」として捉えていた。これらは、日常的な保育の中で明確に表出するものの、長期的な視点での観察が必要であり、保育士は「こどもの見えづらさ」に対して様々な困難感を抱きつつ、試行錯誤しながら関わろうとしていた。また、保護者との情報共有や協力が上手くいかず、家庭との連携の難しさを認識していた。一方で、看護師の「こどもの見えづらさ」の認識は、専門性や経験により分散し、心身の健康問題だけでなく、社会的背景や家庭環境など多面的な視点で子どもを捉えていた。また、保護者自身が抱える問題も「こどもの見えづらさ」として挙げられ、家庭内の状況がこどもの健康や発達に及ぼす影響を重視していた。しかし、こうした課題が必ずしも医療や支援によって解決可能とは限らず、看護師自身もその限界を感じていることが示唆された。【結論】本研究の結果から、保育士と看護師は、それぞれの専門性に基づいた異なる視点で「こどもの見えづらさ」を捉えていることが明らかとなった。保育士はこどもの日常生活や行動の変化に着目し、看護師は健康や社会的背景を含めた包括的な視点を持っていた。これらの視点を相互に補完し合うことで、こどもへのより適切な支援が可能になると考えられる。今後は、保育士と看護師が互いの役割を認識し、各専門職の強みを活かしながら協働してこどもを支援できる保育体制の構築が重要な課題であると考える。

Presented by Medical*Online